

倉沢 千絵

白無垢をまとふがごとき初浅間

浅間嶺は雪の粧ひ澄み渡る

浅間山入道雲が居座りぬ

斑雪焰まだらゆきの型の土器並ぶ

虚子庵へ日の射して訪ふ初晦日

劇場の跡地むらがるものの芽よ

浅間を題材にした前半三句は、浅間山のスケールを引き立てており、自然への敬虔な思いが伝わる。絵画的な作品世界にイメージが膨らみ、心豊かなひと時を楽しめる。

瓦井 隆子

玻璃窓の結露に書ける指文字の

亡き子の名前流れて消えぬ

永遠に還ることなき子の部屋に

ミニサボテンの花のみ赤し

夫と手をはじめて絡み舗道しよみちを

歩むに足もと何かぎこちなし

もう泣かぬ愚痴はもらさず生きゆかん

早春の野は草萌えのとき

愛息を亡くし(享年・二十二歳)、癒えることのない悲しみを歌にし、時の経過とともに変化する心象が伝わる。己の運命を受け入れ、人生を静かに見つめる氏の視線が深い感慨を促す。

西尾 宣子

初空によきことあれと祈るなり

梶山の辺に歳を重ねて

晴れやかに旧正月迎ふる因幡の国

大伴家持偲びまゐらす

鈍いろの雲の間より幾条も

金の日矢となり陽のふりそそぐ

千切れ雲空に浮べる丘の道

夫の車椅子押し上りゆく

胸深くに染み入るような、印象的な比喩が氏の豊かな表現力と感性を伝える。三十一音に凝縮された万感の思いは歌の中でいつまでも生き続け、鑑賞者に静かに語り続けるだろう。

宇佐美 玲子

ベネチアアンケラスが欲しき海風を

四六時部屋に誘い込むため

デデンとダナエの臀部ラ・フランスは

夜の卓上に身をゆるがせず

思い出の封印をとく秋の夜

カサプランカは一輪でいい

ハマナスの寂しき朱よ北野辺を

遠く離れて東金に咲く

三十一音の詩というべき、独自のリズムと感覚を持った作品は、鑑賞者の感性を刺激し、豊かにする貴重な世界である。☆弊社ホームページにて、宇佐美氏のエッセイをご覧ください。

久間 千也

秋を旅する歌

諏訪湖四首

あのカフェの優しい灯りに安堵する

一年ぶりの変わらぬ町並み

道を掃く丁寧なりズムこんもりと

枯れ葉の毛布に潜りこみたし

来る度にいとノスタルジー

定宿の同じ部屋にて羊羹を食む

靴紐をぎゅっと結ぶ肩越しに

ふわりと浮かぶ「いつてらっしやい」

土屋 真澄

生きて在ることの幸せ初苦

コロコロと風の形を描く落葉

霜降しもふりや今宵の宿を探す鷺

百合匂うサヤサヤ過ぎし半世紀

敗戦忌我胸に在る父の墓

木村修一『戦地より妻と娘(真澄)へ贈った一包』

アカシヤの花打つ霰雷雨かな

人生の機微を感じる土屋氏による五句と、亡きお父様の戦地からの手紙にあった感慨深い一句、俳句を携えて人生を歩んできた二人の作品に、時代を超えて私たちの胸に響く深い心を感じる。